

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2023 年度
氏名	吉留 萌夏	指導教員 (主査)	河野 理恵

論文題目	ポジティブ感情がメッセージ受容に及ぼす影響の検討
------	---------------------------------

本文概要

【問題・目的】 私たちの生活は意思決定を行うことで成り立っており、その意思決定にはその時の感情が関係しているとされる(秋山他,1994)。竹村(1988)によると、ポジティブな感情状態時には物事に対して熟考せずに意思決定が行われる可能性が高いとされ、安易な判断を行ってしまいやすいと考えられる。しかしながらこれまでの研究では、ネガティブな情報や感情に焦点があてられ、ポジティブな情報や感情に関する研究は少ない。そのため、ポジティブ感情特有の情報処理過程に関する詳細な特徴を明らかにすることが必要である。そこで実験参加者にポジティブな感情を喚起した際、研究1として、与えられたメッセージの自己関与度の高さがメッセージの受容過程や意思決定にどのような影響を与えるのか、研究2として、メッセージの発信者属性がメッセージの受容過程や意思決定にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした実験を行った。

【方法】 実験参加者：研究1,2それぞれ大学生40名(ポジティブ群20名,ニュートラル群20名)。研究1におけるメッセージ：卒業論文あるいは卒業試験が必修化されることについてのメッセージ(高関与あるいは低関与)。研究2におけるメッセージ：新型コロナウイルスワクチン接種について発信者属性が異なるメッセージ(専門家あるいは一般人)。研究1,2における従属変数：①メッセージへの賛否度,②メッセージ受容時の内的状態,③メッセージへの賛意決定に対する熟考度。①の測定のために、独自に尺度を作成した。②の測定のために、決定過程及び決定時における内的状態尺度(竹村他,1987)を参考に独自に尺度を作成した。③の測定のために、失敗への予期・熟考尺度(外山,2015),成功への熟考尺度(外山,2015)を用いた。研究1と2それぞれにおけるポジティブ群では、感情操作としてゲームを実施し、その前後で肯定的感情尺度(小川,2000)を測定した。ニュートラル群においては感情操作を行わなかった。研究1における実験計画：感情(ポジティブ・ニュートラル)×自己関与度(高・低)の2要因4水準の実験参加者間×実験参加者内混合計画。研究2における実験計画：感情(ポジティブ・ニュートラル)×発信者属性別メッセージへの賛成度(一般人・専門家)の2要因4水準の実験参加者間計画。

【結果・考察】 感情操作によってポジティブ感情が喚起されたかを確認するために、肯定的感情得点について感情操作を行う前後で対応のあるt検定を行った。その結果、研究1と2どちらにおいても、感情操作前よりも後の得点が1%水準で有意に高く、ポジティブ条件の設定が妥当であったことが確認された。研究1において、失敗への熟考得点に関して、2要因(感情×自己関与度)の分散分析を行ったところ交互作用が0.1%水準で有意となり、単純主効果を検定したところ、ポジティブ群では自己関与度高条件よりも自己関与度低条件の方が0.1%水準で低かった。この理由としてポジティブな感情が喚起されると、単純な情報処理が行われ、失敗に対して予期や熟考されることがなくなり、それが自分に関係がないとみなすほど顕著であったと考える。また、メッセージへの賛否度得点に関しても同様の分析を行ったところ交互作用が10%水準で有意傾向となり、単純主効果を検討したところ、ポジティブ群では自己関与度高条件よりも自己関与度低条件の方が0.1%水準で高かった。この理由として、文章の内容を深く吟味しなくとも「課題に対してメリットがあるのならば賛成しよう」と考える者が多かったと考えられる。研究2において2要因(感情・発信者)の分散分析を行った結果、すべての従属変数において有意な結果は見られなかった。この理由としてメッセージ内容の親近性が考えられ、検討の余地が残った。